

# エミリー・ディキンソンと音・色： “A Route of Evanescence”(1489/J1463)精読

重迫隆司  
(人間文化学科)

本論は、ディキンソンの“A Route of Evanescence”(1489/J1463)の精読である。その目的は、現代の世界に蔓延る閉塞感の原因である新自由主義、グローバリゼーションに対抗しうる(人)文学研究の意義を詩の解釈によって示す事である。一編の詩の精読により、言葉が持つ力を、詩におけるその意味作用、他のテキスト(言葉)の引用、文字と音の効果という観点から明らかにすることで目的を達成しようとする試みである。

【キーワード：ディキンソン、ハチドリ、シェイクスピア、エアリエル、言葉の力】

## はじめに

全てが新自由主義(Neoliberalism)というイデオロギーに支配されつつある現在の世界の中で、文学や人間文化学といった人文学がなすべきことは何か。間違いないのは、あらゆることを効率や数字で評価しようとする事への抵抗である。グローバル化する世界が叫ばれつつ、そこで問題にされる「言葉」は単なる情報を伝える手段としてのものであり、計量化される数値や資格で表されるものにすぎない。人間が人間である本質としての言葉が重要なはずである。それなしでは、文明も、文化も、科学も、技術も、心も、無意識も存在し得ないような言葉が。

本論では、そのような言葉の力を古来示し続けてきた文学、特に詩のおもしろさを示すことで時代の風潮に抵抗する一助としたい。具体的には、“Publication - is the Auction/ Of the Mind of Man”(788/ J709)「出版は人の心のオークション」と自身の詩の出版を拒み、“I'm Nobody! Who are you?”(260/ J288)「私は誰でもない!あなたは誰?」と“Somebody”「偉い人」をうるさがった19世紀アメリカの女性詩人 Emily Dickinson (エミリー・ディキンソン、1830-1886, Amherst, Massachusetts)の一編の詩を精読する。

## 1. “A Route of Evanescence”(1489/J1463)について

本論で精読するのは、1879年には既に書かれ、1883年まで手紙の中で、7人の友人・知人に送られた以下の詩(1489/J1463)である。右は、まずはできるだけ直訳調の私訳1である。詩にタイトルを付けなかったディキンソンの詩は、その第一行目か、彼女の詩を編集した研究者が付けた番号で呼ばれる。( / J)内の最初が現在の定番である Franklin が付けたもので、

Jの後がそれ以前の Johnson が付けたものである。

(私訳 1)

|                                 |                  |
|---------------------------------|------------------|
| A Route of Evanescence,         | 消失のルート、          |
| With a revolving Wheel -        | 回転する輪の -         |
| A Resonance of Emerald          | エメラルドの残響         |
| A Rush of Cochineal -           | コチニール（・レッド）の瞬発 - |
| And every Blossom on the Bush   | すると薺のあらゆる花は      |
| Adjusts it's tumbled Head -     | その乱れた頭を整える -     |
| The Mail from Tunis - probably, | チュニスからの伝令 - きっと、 |
| An easy Morning's Ride -        | 気軽な朝の一乗り（散歩） -   |

英語でも日本語でもこれが何の詩か判断するのは困難であろう (*Shmoop* のサイトのこの詩に関するガイドを参照すれば英語話者にとっても同様であることが楽しく理解できる)。もちろん必ずそう解釈しなければならぬということの意味するのではないが、この詩はディキンソン自身によって“A Humming Bird”（「ハチドリ」）と呼ばれており、これまでの研究者 (Finnerty 132-4, Small 44, Vendler 479-81) と同様、本論での私もハチドリの詩として解釈していく。

Franklin 編集の 3 巻本『全詩集』によれば、1489 番の詩には以下の A~G 7 種の異稿 (Variants) が知られている (*The Poems* 1305-8)。本論で引用したのは、G であるが、手紙の他の言葉と『書簡集』 (*The Letters*) の手紙の番号 (L の後) を記しておく。

A: 2 行目の A 以外の異稿では“a revolving Wheel”の部分が、“a delusive (架空の) wheel” となっており、他の候補、dissolving (溶けるように消える)・dissembling (偽装する)・renewing (再生する) が示されている。

B: About 1879, to Helen Hunt Jackson, “To the Oriole you suggested I add a Humming Bird and hope they are not untrue -”(L602).この自筆原稿 (manuscripts) は、エミリー・ディキンソン記念館 (*The Emily Dickinson Museum*) のサイトで閲覧可能である (自筆原稿の言葉の配置、ディキンソンの筆跡がもたらすおもしろさは別の機会に論じたい)。

C: About 1879, to Louise and Frances Norcross, signed “Humming Bird.” (letter lost).

D: About January 1880, to Sarah Tuckerman. (L675)

E: About November 1880 in a letter to T. W. Higginson, ED referred to this poem (among the four she enclosed) as “A Humming Bird.”(L675)

F: About autumn 1882 to Mabel Loomis Todd, “I cannot make an Indian Pipe but Please accept a Humming Bird -”(L770).

G: About April 1883 in a letter to Thomas Niles with two other poems, referred as “A Humming Bird”(L814).

## 2. もう一編のハチドリ詩

20年前の1862年秋頃に書かれた次の詩(370/ J500)も、ハチドリが庭にやって来て、去って行った様子を描いている。下線を引いた箇所に、精読する詩(1489 /J1463)と共通の場面、見立てがあるので、引用し私訳とともに示しておく。

|  |                         |
|--|-------------------------|
| Within my Garden, <u>rides a Bird</u>              | 私の庭に、小鳥がやってくる           |
| <u>Opon a single Wheel-</u>                        | 一輪車に乗って -               |
| Whose spokes <u>a dizzy music</u> make             | そのスポークは目もくらむ音楽を奏でる      |
| As 'twere <u>a travelling Mill</u> -               | まるで高速回転する水車のように         |
| <br>   |                         |
| He never stops, but slackens                       | 決して止まらず、速度を落とす          |
| <u>Above the Ripest Rose</u> -                     | 満開の薔薇の上で -              |
| Partakes without alighting                         | 降りて止まることなく飲み            |
| And praises as he goes,                            | 去りながら賛美する、              |
| <br>   |                         |
| Till every spice is tasted -                       | あらゆる香りを味わうまで -          |
| And then <u>his Fairy</u> [Microscopic] <u>Gig</u> | そして彼の妖精の[顕微鏡でしか見えない]馬車は |
| <u>Reels</u> in remoter atmospheres -              | はるかかなたの空中でリールダンスを踊る -   |
| And I rejoin my Dog,                               | すると私は私の犬のところに戻る、        |
| <br>   |                         |
| And He and I, perplex us                           | そして彼と私を、私たちを当惑させる       |
| If positive, 'twere we -                           | 実在したのかどうか、私たちだったのか -    |
| Or bore the Garden in the Brain                    | あるいは脳の中の庭だったのか、と        |
| This Curiosity -                                   | この珍しいものを生んだのは -         |
| <br>   |                         |
| But He, the best Logician,                         | しかし彼、一番優れた論理学者は、        |
| Refers my clumsy[duller -] eye -                   | 私の出来の悪い[鈍い]目を差し向ける -    |
| To <u>just vibrating Blossoms!</u>                 | ただ揺れている花々へと!            |

An exquisite Reply!

申し分のない答え！

庭に一輪車でやってくる (rides/ Opon a single Wheel) 小鳥 (a Bird) もおそらく、ハチドリで、高速回転する (同時に旅する) 水車 (a travelling Mill) のように羽ばたきし、音を立て (a dizzy music)、また鳴き声も発するであろう。ハチドリは、満開の薔薇の上で (Above the Ripest Rose) ホバリングしながら花の蜜を吸い、妖精の馬車 (Fairy Gig) に乗って去っていく珍しいもの (Curiosity) であり、本当にやって来たのかどうかは、ただ揺れている花 (just vibrating Blossoms) が示唆するのみである。同じ状況を描いた詩であるが、ハチドリの色が表されていないのが一番大きな違いであろう。

### 3. ハチドリ、『テンペスト』、『完璧な赤』(コチニール)

次に我々のハチドリの詩(1489/J1463)を解釈するために、ハチドリとシェイクスピア (Shakespeare) の『テンペスト』(Tempest)、そして『完璧な赤』(グリーンフィールド)であるコチニールについて確認しておく。

コーネル大学鳥類学研究所 (The Cornell Lab of Ornithology) のホームページ、『鳥の全て』(All About Birds) によれば、ハチドリは、アメリカ大陸原産の最も小さな (tiniest) 小鳥で、ディキンソンが暮らしたニュー・イングランドのアマスト (Amherst) にやって来るのは、北アメリカ東部に唯一生息する、緑と赤の閃光 (A flash of green and red)、ノドアカハチドリ (Ruby-throated Hummingbirds) である。同サイトのSoundとVideoの項では、実際に鳴き声や羽音が聴け、飛んでいる様子を動画で観ることもできる。

ノドアカハチドリ (学名: Archilochus colubris) は、体長7-9 cm, 翼を広げた長さ8-11 cm, 重さ2-6 gで、背面と頭頂部は、鮮明なエメラルド色 (bright emerald)、金色に輝く緑色 (golden-green) で、オス (males) は、光が当たると、鮮やかな虹色に輝く赤い喉 (brilliant iridescent red throat) を持つ。この光り輝く、小さな、正確に飛ぶ (brilliant, tiny, precision-flying) 小鳥は、十分な日光のもとで宝石のようにきらめき (glitter like jewels)、次の花の蜜 (nectar) を求めてブンブンという音を立てて消える (vanish with a zip)。毎年夏には花壇で餌を与える人 (feeders) も多い。秋には、メキシコ湾 (the Gulf of Mexico) を一飛びで (in a single flight) 越えて中米に渡っていく。

『北米の鳥オンライン』(Birds of North America Online) によれば、そのノンストップの渡りは往復 1,600 km 以上になる。身体が倍以上の大きさになるまで餌を摂り、渡りに備える。渡りのルート (migration routes) と越冬する場所は正確にはわかっていない。

ちなみに本論に関係する都市間の距離は以下の通りである。Tunis--Naples: 570km、Amherst--Mexico: 3600km、Amherst--Florida: 1095km、Tunis--Amherst: 7500km、

Amherst--Fukuyama: 11100km(www.kyori.info)。

ディキンソンのハチドリの詩(1489 /J1463)を解釈する際、必ず参照されるのが、大詩人 (the Bard) と称されるシェイクスピア (Shakespeare) の単独での最後の作とされる『テンペスト』 (*Tempest*) である。弟アントニオ (Antonio) に位を篡奪され、国を追われた真正ミラノ公爵 (the right Duke of Milan) プロスペロー (Prospero ← prosper 幸運、繁栄) は、娘ミランダ (Miranda ← admiration 驚嘆・賛美の対象) とともに無人島に漂着し、そこで暮らしていた (松岡 14)。プロスペローは、学問により身につけた魔術を使って、嵐 (Tempest) を起こし、アントニオ、ナポリ王 (king of Naples) アロンゾ (Alonso) とその息子ファーディナンド (Ferdinand)、王の地位を狙う弟セバスチャン (Sebastian) や他の貴族達が乗った船を難破させた。彼らは、アロンゾの娘で、アフリカのチュニス王妃 (queen of Tunis) となったクラリベル (Claribel) の結婚式から帰る途中であった。

第二幕、第一場で、悪巧みをするアントニオがセバスチャンに語る以下のセリフがディキンソンのハチドリの詩を解釈する際、引用される箇所である。“she[Claribel] that from Naples/ Can have no note, unless the sun were post --” (2. 1. 245-6) (「太陽が伝令 (post: messenger) にでもならない限り、ナポリからどんな便りも届かない彼女」)。すなわち、ディキンソンの詩における Tunis (チュニス) は、とんでもなく遠い場所として言及されるのである。しかし、既に見たように、Tunis--Naples 間はほんの 570km であり、往復 1,600 km (片道なら 800km) をノンストップで飛べるハチドリには、決して遠くない。

むしろ、チュニスを首都とするチュニジア (Republic of Tunisia) が、フェニキア人が築いた古代都市カルタゴ (Carthage) で有名であり、その国旗は赤色であること、またその古代フェニキア人の海港都市 (現在のレバノン南部地中海岸の町) テュロス (Tyrus) が、帝王紫、貝紫 (Tyrian purple) の赤色で有名であったことのほうが重要であろう。

アマストのハチドリが渡りで帰って行く北米南端のメキシコ (United Mexican States) は、アステカ文明が栄えた地であり、世界最大のコチニールの産地であった。またその国旗は、緑白赤の3色である。インカ帝国があった南米北西のペルー (Republic of Peru) のナスカの地上絵 (Nazca lines) には、全長 96m に及ぶハチドリの絵があり、国旗は赤と白を基調としていることも同時に思い起こされる。アメリカ大陸では、太古からハチドリ及び、太陽を表す赤色は重要だったのである。

グリーンフィールドが『完璧な赤』 (Perfect Red) で明らかにしたのは、完璧な赤色の染料としてのコチニールを大航海時代の世界中の国々が、いかに国を挙げて必死で追い求めたかであった (コチニールは、サボテンに寄生するコチニール・カイガラムシを原料とする染料で、当時はメキシコ以外では生産困難な、また製法も謎であったため、銀に匹敵する最高

級の貿易品であった)。シェイクスピアの時代には王族、貴族に限られていた完璧な赤色で染めた衣服は、ディキンソンの時代には一般的になり、その後合成染料に取って代わられることになる。ピューリタンの社会では、恐らく派手な色は敬遠され、またホーソン (Hawthorn) の『緋文字』 (*the Scarlet Letter* (1850)) の (悪) 影響もあつたに違いないが、ディキンソンはノドアカハチドリ (Ruby-throated Hummingbirds) のルビーよりも完璧な赤色を表すためにコチニール (Cochineal) という語を使つたに違いない。チュニス (Tunis) という語の選択にも赤色 (他の英語では、scarlet, carmine, crimson, royal purple 等が考えられる) との連想が働いていたはずである。

さらに、『テンペスト』で一番活躍するのは、プロスペローに仕える空気の妖精 (an airy spirit) エアリエル (Ariel) である。同音の “aerial” は「空気の」を表す形容詞であり、“airy-fairy” は、空想的な、妖精のようなという意味である。エアリエルは、プロスペローの魔法の杖 (magic staff) によるどんな命令にも従い、見事に事を運ぶ。嵐を起こし、船を難破させたのも実際はエアリエルである。プロスペローはエアリエルを「妖精」 (“spirit”) とだけでなく、「小鳥」 (“bird”)、「ひよこ」 (“chick”) と呼ぶ。エアリエルは空だけでなく、水中も火の中もどんな所へも一飛びで、すぐに姿を消し、突然姿を現し、何にでも変身でき、美しい音楽を歌い奏で、虹の女神アイリス (Iris) も登場する仮面劇 (*the Masque*) の幻を見せることもできる。

#### 4. 音の効果

それでは、音の効果に注意しながら 1489 /J1463 番の詩を解釈してみたい。詩型と韻律については、Oliver がわかりやすく、特に 19 世紀の詩の流行については、Miller が詳しい。ディキンソンがほとんどの詩で使用したのは、賛美歌 (Hymn) やバラッド (Ballad) の型式であり、4 行を一連とし、偶数行で脚韻 (rhyme) を踏むのが特徴である。1489 /J1463 番の詩もそうであり、2, 4 行目の “Wheel” と “Cochineal” は完全韻、6, 8 行目の “Head” “Ride” は不完全韻となっている。後者は、それ故、Red を同時に感じさせる。詩の冒頭は大文字で表すのが普通だが、この詩においては、2, 7 行目以外全て “A” で統一されているのが目を引く。また、“R” “E” “W” “B” “M” “T” の大文字もキーワードを際立たせ、頭韻 (alliteration) や視覚韻 (eye rhyme) の効果を上げている。以下、『リーダーズ英和辞典編集部』編の『漫画で楽しむ英語擬音語辞典』を参照しつつ、母音は音の変化が激しいので、子音の音の効果に注目しながら (竹林 284-5, 301-2)、1 行ずつ精読していく。

1 行目の “Route” は、他の R, r の音と響き合いながら、最後の “Ride” と直結する。“Evanescence” は、vanish, disappear, evaporate, fade と同義で次第に消えていくという意味の evanesce の名詞形である。同時に、“Ever-naissance” としてシェイクスピアの時代

“Re-naissance”を、“Ever-ness-sense”として永遠性の感覚を、“Ever-ness- cense”とすれば永遠の芳香や身分を同時に想起させる。また、虹の女神 (Iris) の複数形 irides に由来する光の当たり方によって変化するプリズムのような虹色、玉虫色を意味する “Iridescence” を想起させ、後のノドアカハチドリを表す2色の鮮やかな色合い (vivid metallic color) を先取りしている。1行目は、今は去ってしまったハチドリの辿った軌跡である。

2行目最初の “With” は、最後の “Wheel” と頭韻をなしつつ、ハチドリの羽音を表すブンブンという音 (whiz, whir, whirr) や大騒ぎ (whoop)、また口笛のようなさえずり (whistle, warble) や、ぐるぐる回る、旋回の動き (whirl) をも暗示する。“Wheel” を修飾する “revolving” は、前述したように、ディキンソンが幾つか別の語を考えて最後に選んだ語である。それらは、delusiye, dissolving, dissembling, renewing であったが、全てに /r/, /l/, /v/, /d/, /g/, /z/ といった羽音を表す音が含まれていることが重要であろう。それらの音はこの詩全体に散らばっており (1, 3, 4行目の前置詞 “of” にも/v/の音がある)、絶えず聞こえ (また文字として見え) 続ける (th/ð/の音も加えてよかろう)。そして英語では例えばブンブン、ブーンという音を表す語 (buzz, zip, zzz, dor, dorr, drone) を連想させながら、ハチドリが飛ぶ音を響き渡らせる。2行目はハチドリの高速の羽ばたきを一輪車に喩えた描写である。

3行目は去っていったハチドリの羽根と頭頂部背面の色 “Emerald” をハチドリが後に残していった音、残響 “Resonance” として表している。“Emerald” は “M-road” として “Resonance” とともに正に最終行の “Morning’s Ride” と響き合う。

4行目はノドアカハチドリのオスの特徴である喉まわりの色の描写である。“Cochineal” (コチニール) の赤の重要性については、前章で述べた。“Rush” によって花から花へのすばやい動きが導入され、次の行の “Bush” と響き合いつつ、/k/, /tʃ/, /ʃ/ の音によって動きが同時に表現されることが重要であろう。flash (突然現れる)、flush (パッと飛び立つ、赤面する)、hush, hiss, shoo, sibilant, sh/ssh, shush, shriek (金切り声やシュッという音)、shrike (モズ), swoosh (ビューと音を立てる), skirr (速く飛ぶ) 等が連想される。

5, 6行目 (あるいは第2連の1, 2行目) は、ハチドリが去った直後に取り残された花の描写である。この2行のみが文になっている。370/ J500番で最後に描かれたのと同じで、震えて(揺れている)花だけがハチドリがいたことを示すのである。ハチドリの “Rush” に襲われた “Bush” の “Blossom” が、おののき (trembled)、驚きながら乱れた髪の毛を整える (“Adjusts its tumbled Head”) 場面として、/m/, /h/ の音は、RRRと綴った場合同様、ハミング (hum, hmm, mmm) であり、“Blossom” の /l/, /s/ は、ハチドリが蜜を吸う音を連想させ (すするsuck, ちびちび飲むsip, ピチャピチャslup, slurp)、6行目の/dʒ/, /ts/, /t/, /d/ の音は、4行目の “Cochineal” とともにハチドリの鳴き声の音でもある (声を震わせて鳴くtrillや、chee-dit, cheep, chirp, chip, chit, chitter, churr, chirr, tweet, twitter, twit, twit- twit

等)。“Blossom”“Bush”“tumbled”の連続により、ディキンソンの好きだったマルハナ蜂 (bumble bee) も一緒に飛んでいるかのようだ。

7, 8行目 (あるいは第2連の3, 4行目) は、ハチドリが訪れてくれる意味の考察である。7行目に突然現れる推量の副詞“probably”が詩の語り手の推量であることを示す。この語にある /p/ /b/の音は、ピーピー、チーチー (beep, bleep, peep)、ピヨピヨ (pip, pee-pee) という鳴き声や、嘴でつつく (peck) 様子、同じくかわいい声で鳴くセキレイ pipit(titlark) を、また瞬間的色変化を表す plink や pop を連想させる。7行目で、ハチドリはチュニスから (手紙を持って) やって来た使者であると推測し、8行目で、チュニスから飛んで来ることだって、ハチドリには朝飯前だろうとつけ加えるのである。

それは、「太陽」が「伝令」でなければチュニスは遠すぎる、と表現したシェイクスピアへの挑戦とも考えられる。エアリエルのようなハチドリにはチュニスから手紙を運んでくることなんて簡単 (easy) ですよ、と。

おわりに

以上の解釈を踏まえて、ここで、もう一度原詩と日本語で音にこだわってみた私訳2を示す。

(私訳2)

|                                 |                  |
|---------------------------------|------------------|
| A Route of Evanescence,         | 刹那閃虹消える旅路、       |
| With a revolving Wheel -        | 回転する車輪による -      |
| A Resonance of Emerald          | 響き渡る鮮緑           |
| A Rush of Cochineal -           | 俊敏なる鮮紅 -         |
| And every Blossom on the Bush   | すると咲き乱れる花々はおのおの  |
| Adjusts it's tumbled Head -     | おののく頭を整える -      |
| The Mail from Tunis - probably, | おそらく、チュニスからの使者 - |
| An easy Morning's Ride -        | 気安い朝の旅 -         |

最後に、既に述べたハチドリの羽音や鳴き声を表す音と同様に、エアリエル (Ariel) の文字が原詩の中で飛び回っている様子を確認しておく。

|                          |                               |
|--------------------------|-------------------------------|
| A Route of Evanescence,  | <i>A R..e..E.a.e..e..e,</i>   |
| With a revolving Wheel - | <i>.i.. a re..l.i. ..eel-</i> |
| A Resonance of Emerald   | <i>A Re...a.e.. E.eral.</i>   |
| A Rush of Cochineal -    | <i>A R... ..i.eal-</i>        |



|                                 |                                      |
|---------------------------------|--------------------------------------|
| And every Blossom on the Bush   | <i>A. e.er. J..... ..e....</i>       |
| Adjusts it's tumbled Head -     | <i>A..... i. ....le .ea. -</i>       |
| The Mail from Tunis - probably, | <i>..e .ail .r. ...i. - .r..a.l,</i> |
| An easy Morning's Ride -        | <i>A. ea. ..r.i... Ri.e -</i>        |

ディキンソンはこの詩において、小さな (tiniest) ハチドリ (Humming Bird/ AR: Archilochus colubris) が訪れてくれた喜び・感動 (admiration) を、ハチドリが去ってもなお、感じられる空気のリアルさ (Air Real) を、シェイクスピア (the Bard) 『テンペスト』 (*Tempest*) の空気の妖精エアリエル (Ariel) が自由自在に消えたり、現れたりする魔法 (magic) に重ね合わせ、他の音や色を表す文字や表現同様に、Ariel の文字を、詩の中に飛び散らせることで、その奇跡 (miracle) 的瞬間を詩の言葉に定着させようとしたのではなかろうか。愛する人々と感動を共有するためにも。

詩を読むことは、単に言葉から情報を得ることとは全く異なる。ディキンソンのハチドリの詩が示すのは、それ自体一義的には決して決まることなく、解釈する度に絶えず変化する言葉の多義的重層的な意味作用であり、また同時にそんな意味とも時には無関係に動き回る言葉の、文字の、音の効果である。言葉のそのような力を感じ取ることが、詩を読むことのおもしろさ、喜びであり、詩の言葉を味わうことは、世にはびこる軽く、無知で、無責任な「言葉」を相対化し、それらが体現する 1%イデオロギーに対抗し生き抜いていく勇気を与えてくれるはずである。

\*本稿は、ふくやま文学館で行われた人間文化学科主催の文化フォーラム 2014「アメリカ文学はなぜおもしろいのか」(全 5 回) の第 2 回「エミリー・ディキンソンと音・色」(2014 年 7 月 20 日 (日)) で発表したものを加筆修正したものである。

#### 参考文献

- Dickinson, Emily. *The Letters of Emily Dickinson*, edited by Thomas H. Johnson and Theodora Ward. 3 vols. Cambridge: Belknap /Harvard U, 1958.
- . *The Poems of Emily Dickinson: Variorum Edition*, edited by Ralph Waldo Franklin. 3 vols. Cambridge: Belknap /Harvard U, 1998.
- Finnerty, Páraic. *Emily Dickinson's Shakespeare*. Amherst: U of Massachusetts. 2006.
- 吹浦忠正『世界の国旗 ビジュアル大辞典』学研、2007。
- グリーンフィールド、エイミー・B (佐藤桂訳)『完璧な赤「欲望の色」をめぐる帝国と大航海の物語』早川書房、2006 (Greenfield, Amy Butler, *A Perfect Red: Empire, Espionage,*

*and Quest for the Color of Desire*. 2005)。

Miller, Cristanne. *Reading in Time : Emily Dickinson in the Nineteenth Century*. Amherst: U of Massachusetts. 2012.

Oliver, Mary. *A Poetry Handbook*. San Diego : Harcourt, 1994.

『リーダーズ英和辞典編集部』 編『漫画で楽しむ英語擬音語辞典』 研究社、1985。

Shakespeare, William. *Tempest*. About 1611. (『テンペスト』 藤田実編注『大修館シェイクスピア双書』 大修館、1990。松岡和子訳『シェイクスピア全集 8』 ちくま文庫、2000。福田恆存訳『夏の夜の夢・あらし』 新潮文庫、1971。)

Small, Judy Jo. *Positive as Sound: Emily Dickinson's Rhyme*. Athens: U of Georgia, 2010 (1990).

竹林滋『英語音声学』 研究社、1996。

Vendler, Helen. *Dickinson: Selected Poems and Commentaries*. Cambridge: Belknap/ Harvard U, 2010.

#### 参考 URL

*All About Birds*, The Cornell Lab of Ornithology. [www.allaboutbirds.org/guide/ruby-throated\\_hummingbird/ id](http://www.allaboutbirds.org/guide/ruby-throated_hummingbird/id).

*Birds of North America Online*. [http:// bna.birds.cornell.edu/bna/species/204 /articles/ introduction](http://bna.birds.cornell.edu/bna/species/204/articles/introduction).

*Emily Dickinson Archive*. <http://www.edickinson.org/>

*Emily Dickinson Lexicon Website*. <http://edl.byu.edu/>

Shmoop. Learning Guides. Poetry. [www.shmoop.com/route-of- evanescence/](http://www.shmoop.com/route-of-evanescence/)

*The Emily Dickinson Museum*. [http://www.emilydickinsonmuseum.org/ed/files/poetry/ totheorirole\\_large.jpg](http://www.emilydickinsonmuseum.org/ed/files/poetry/totheorirole_large.jpg).

**Emily Dickinson and Sound/ Color: A Close Reading of  
Emily Dickinson's "A Route of Evanescence" (1489 /J1463)**

Takashi Shigesako

This paper is a close reading of Emily Dickinson's "A Route of Evanescence" (1489 /J1463). By interpreting the poem, the purpose of this paper is to show the significance of the study of literature or humanities to cope with Neoliberalism or Globalization that has been causing a sense of despair in the world today. This paper is also an attempt to accomplish the purpose by clarifying the power of language from the viewpoint of signifying of the words in poetry, quoting other texts, and the effects of letters and sound through the close reading of a poem.

**【Keyword: Dickinson, Humming bird, Shakespeare, Ariel, the Power of Language】**